

★国会議員選挙を前にしたベネズエラの政治情勢（1）＝スティーブ・エルナー

最近、ベネズエラの政治情勢をめぐり注目すべきレビューが出たので、三回に分け翻訳掲載します。「ジャコバン・マガジン」誌10月26日に掲載されたベネズエラ専門家のエルナー氏の論考です。情勢はマドゥーロ陣営の政治基盤が依然として強力で、民衆の支持を失っていないこと、中道野党の中に極右と断絶し国家再建を求める動きが出ていること、トランプ政権と繋がる極右勢力が国内基盤を失いつつあることを示しています。1,2回ではその辺を明らかにしています。そして3回目ではマドゥーロ政権が現下の情勢を含めどのように情勢を打開しようとしているかを探っています。

ベネズエラ中道派と左翼の結集は米干渉主義へ打撃（1）

平均的なベネズエラ人は米国の制裁に苦しめられていると感じ、ならば抵抗しなければと考えている、とスティーブ・エルナーは論じる。

ベネズエラのクラウディオ・フェルミンは中道派の政治家だ。1990年代初頭には新自由主義をすすめたカルロス・アンドレス・ペレス大統領の秘蔵っ子だった。だから、当初はウーゴ・チャベスには断固反対の立場をとっていた。しかしごく最近になって、彼は同じ政治陣営の他の何人かと同じように進路を変えた。特に、ドナルド・トランプがベネズエラにいろいろな制裁を科して以来、フェルミンは米国の介入主義と国内の極右の両方に強く反対し、それを率直にいうようになった。

このような変化は、ベネズエラの政治が最近どれだけ変化したかを示している。2002年4月のクーデター未遂以来、同国の左派政権は、政権交代をどんな手段を使ってでも実現しようと団結している反対派と対峙してきた。しかし今、そのような極端な両極化は弱まりつつあるように見える。

フェルミンは、元カラカス市長で大統領選の候補になったこともある。彼はいま、米トランプ政権がニコラス・マドゥーロ大統領をさらに孤立させようとして、12月6日の国会議員選挙を棄権するように主張していることに反抗している。このような中道派の政治家は彼一人ではない。

フェルミンの民族主義的な言辞は先月のインタビューで示された。彼は、ベネズエラの右派とトランプ政権、それに追随する他の諸政府を激しく非難して、こう

のべた。「超大国が仲間にしているのは反ベネズエラの政治エリートだ。彼らには真に、ベネズエラの心がない。彼らは国が本当に必要としているガソリンを積んだ石油タンカーの到着を妨害した。制裁は国家主権の否定だ」。米国によるベネズエラに対する国際的な制裁の実施には、ベネズエラ野党内の離脱派が反対している。これによってベネズエラ政治に再編が大きく起きている。

近年にいたるまで、野党は団結していた。2015年の国会議員選挙では、統一した反政府投票を支持し、単一の幅広い野党候補者名簿を実現し、勝利を収めた。その後、2019年1月には野党全体がフアン・グアイドー国会議長による大統領自己宣言に賛成した。ところが今、中道派の大部分は、国の政治体制の正当性を認めて、12月6日の国会選挙ボイコットを呼びかけている右派の政治家と対決している。

中道と左翼の結集は、米政策がベネズエラ国民に加えている計り知れない苦しみの結果だけではない。それはまた、反対勢力への強硬策を追求しながら、中道派の要求をいくつか受け入れたニコラス・マドゥーロ大統領の巧妙な戦略の産物でもある。北米担当のカルロス・ロン副大臣は、「マドゥーロは不可能にみえたことを達成したことで賞賛されなければならない。大きな塊の野党を反乱から平和に動かしたのだ」と私に語った。

しかし、この戦略には問題もある。ビジネス界の利益に譲歩することは、マドゥーロの和解戦略と密接に結びついているが、これは与党ベネズエラ社会主義統一党（PSUV）内の左派勢力から批判を受けている。さらに、与党の大祖国戦線（GPP）に属する共産党と他のいくつかの政党やグループは、マドゥーロと決別し、次の選挙で対抗する名簿を作成した。

また中道派の立場にもかかわらず、中道派が、とてもマドゥーロ政権の安定した同盟者というわけではないことは明らかだ。彼らの中には、時間を置いて、いずれはリコール選挙でマドゥーロを強制的に排除する時宜を待っている人たちもいる。

（つづく）

◇スティーブ・エルナー＝元ベネズエラ・オリエンテ大学教授。「ラテンアメリカ展望」誌副編集長。

◇原文・米左派雑誌「ジャコバン・マガジン」10月26日（翻訳 田中靖宏）